

環境芸術の研究（社会的機能と可能性）—教育実践プログラムへの展開—
 A Study on Environmental Art and Design (The social function and possibility)
 - Development toward the program for educational practice -

高須賀 昌志 (教育・准教授)

Masashi Takasuka (Faculty of Education, Associate Professor)

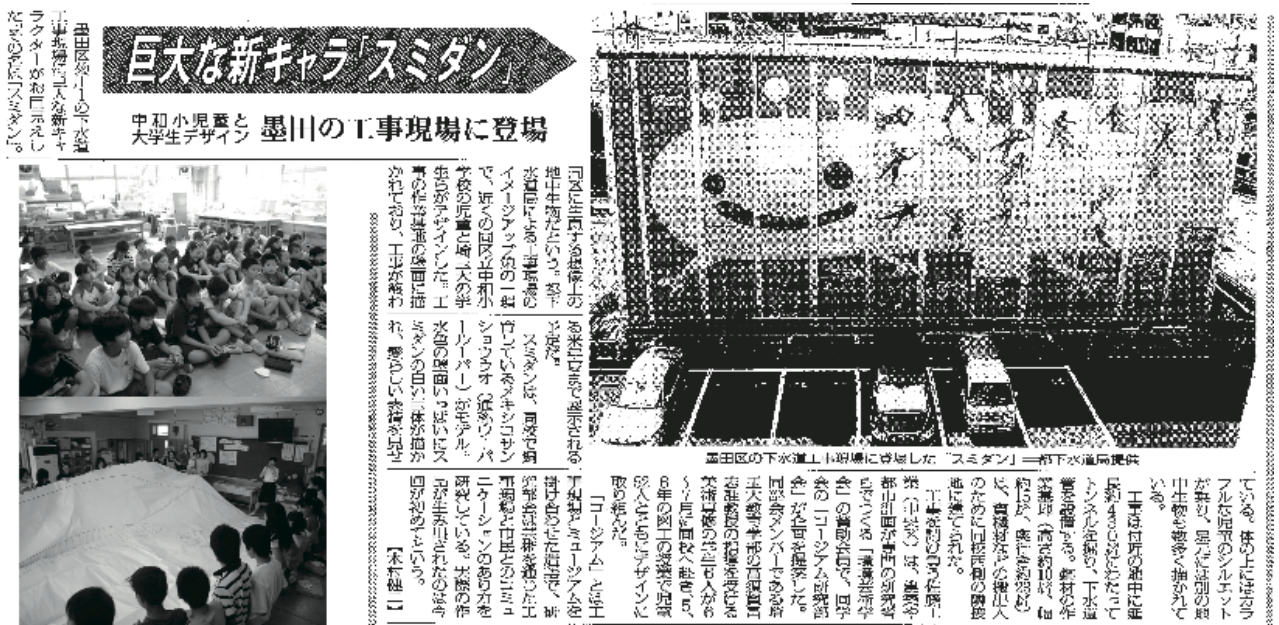
1 研究の目的

本研究代表者はこれまでの研究で環境芸術（パブリック・アート）の調査・研究および実制作を進めてきた。そのなかで、環境芸術が持たなければならない社会性や公共性、市民との高いコミュニケーション能力が要求される必然性などを明らかにしてきた。本研究は、そうした特性が現代社会においてどのような役割を担い、環境芸術が触媒としてどのような作用を促すのか、また、その可能性が今後どのように広がっていくのかということについて明らかにしようとするものである。その上で本年は実際の教育現場において環境芸術を題材内容に取り入れ、具体的な働きを顕在化させ、授業研究を通じて美術教育における題材の可能性を広げると同時に、環境芸術の社会的機能の一断面を実践によって実証しようとするものである。

2. 研究成果の概要

A. 「菊川イメージアッププロジェクト」 『スミタン』

東京都水道局が所管する440mの下水道トンネル工事に合わせ出現する大きな防音建屋の壁面を、近隣の小学校（墨田区立中和小学校）の児童たちと一緒にアート化するプロジェクトである。児童の指導は、小学校教員と埼玉大学教育学部美術教育講座の学生6名の参加により実施した。綿密な授業計画に基づき、6月下旬より全7日間の小学校における正規授業時間において研究授業おこない、児童と大学生とのコラボレーションにより実作品を制作した。（工事期間2年間の展示される。）



2007年8月26日 毎日新聞

B. 「西部総合病院壁面アートワークプロジェクト」

本学における地域連携の一環として、大学に隣接する病院からの協力要請を受けて、埼玉大学教育学部美術教育講座教員2名（小澤基弘教授・高須賀）と大学院学生3名とが共同して実施した。病院施設の屋内環境整備を目的としながら既存の環境に加え、周辺要素である利用者（医師・看護師・患者（入院/外来/小児科））等、地域における病院の役割や位置づけなど多岐にわたる問題について多角的に考察を重ねながらデザイン計画を立案して、制作・設置をおこ

なった。病院内部の室内環境を考える上で単に景観としてのデザイン処理に留まることなく、その背景にある課題に目を向けることは、機能性のなかでも表面に現れてくる事柄に加え、普段見落としてしまう裏側に隠れている本質的な心的機能について考察することにつながっていく。病院という不特定多数の幅広い層の人間が介在する場である。このような公共性の高い対象は、環境芸術を考える上で様々な視点を提供しながら“環境芸術のはたらき”についてわかりやすく顕在化させてくれる。大学生の研究テーマと相応しいものであろう。

さいたま 西部総合病院 外来病棟



診察室に面する廊下の一角に、右側面は完成した大木のデザイン
（左）。左側面は完成した大木のデザイン

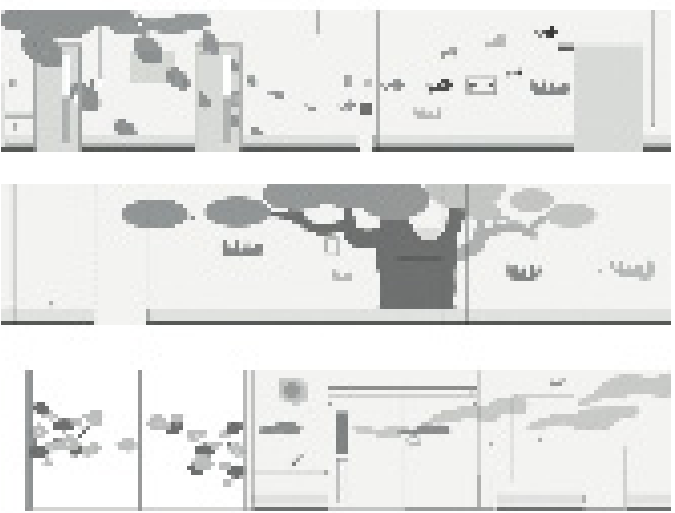
明るい癒やしの空間に

院生のデザインで変身

埼玉大 美術教育 院生のデザインで変身

患者に「こころ」

と達成感を味わっている。休みや退院後に、指輪
不安定な患者の気持ちに寄り添う。この「こころ」を
と、患者の気持ちに寄り添う。この「こころ」を
と、患者の気持ちに寄り添う。この「こころ」を



2007年10月21日 毎日新聞

3. 教育における題材としての「地域住民にとっての環境芸術」

地域社会とは「一定の地域的範囲内の上に、人々が住む環境基盤、地域の暮らし、地域の自治の仕組みを含んで成立している生活共同体」をいう。その共同体の中には当然小学校や児童また学生も含まれる。我々の生活環境にあふれるモノや建築物は、そのほとんどが人間によって構想されその所産として生みだされている。「何処かに、誰かが、誰かのために、誰かに依頼し、誰かがつくり、誰かが享受する。」ここにある「何処かに」が一定の地域的範囲内であり、すべての「誰か」が等しく生活共同体の一員であるとすれば、それぞれの意思疎通や共通理解といったものが必要となることは明らかである。しかしながら現代の社会にあっては必ずしもうまく疎通や理解がなされているとは言えない。東京都下水道局では工事予算のうち「イメージアップ費用」という項目が存在し、受注者に対し義務付けを行っている。これは下水道工事そのものが社会的要請からなされているにもかかわらず、その実施にあたっては、交通渋滞や地中工事による地盤沈下など近隣住民にとっては不都合な要因が多く出現する。それに加え、工事そのものの目的やそれによって何が改善されるのかといった有用性については理解されているとはいえない。このような課題に対し、その説明責任を含め工事ひいては下水道事業そのもののイメージアップをはかることを工事与件の一部としているものである。社会から有用で正当な事業であるにも関わらず不当なイメージを与えられていることを払拭するための措置である。地域における病院もまたそのような二律背反した要素を強く含み持つ施設であるといえる。

環境芸術を創造することは多岐に渡る諸要素をどのように統合し、いかに答えを導きだすかという社会環境と緻密に関係を紡いでいく行為である。その行為の中にこそ、教育における重要なテーマが存在すると言えるであろう。作品の「有り様」に対し環境における「在り方」を問いていくこと。とりわけ地域にとっては、その対象範囲が狭い分、深度は深く密度は濃いものでなければなるまい。我々の生活の身の回りを取り囲む存在として環境はある。地域社会には芸術の疎通力やデザインのコミュニケーション構築力を発揮できる課題は山積しているのである。このような視点にたてば、教育における環境芸術を媒介とする題材の有用性は明らかであろう。本研究2件の試みは、児童・学生が日常持つことのない出来ない視点や観点を与えることに成功している。